



地域連携活動事例集

2020年度



新潟国際情報大学

学長あいさつ

新潟国際情報大学 学長

野崎 茂



文部科学省では平成27年度から、大学が地域の自治体や中小企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をすると共に、その地域が求める人材を養成し学卒者の地元定着率の向上を図る教育カリキュラムを編成することを奨励支援することとしております。大学による「地方創生推進事業」です。

平成6年に新潟県、新潟市と地元経済産業界、教育界など産・学・官・民の各界の期待を担って誕生した私ども新潟国際情報大学の設立理念は「環日本海拠点都市新潟の地に、地域のために国際化、情報化の時代に対応できる有為な人材を育成し、地域と共に生き、地域と共に歩み続け、新しい歴史を創造する大学を目指す」というもの。つまり、本学は文部科学省の最近の施策を先取りした形で設立された大学と言えます。

そこで本学関係者は学外で「地方創生に資する」ような活動をしているのか、どんな活動をしているのかと改めて教員に問うてみたところ、出てくるわ、出てくるわで集めてみたのがこの事例集です。地域、対象とする年代層、分野、内容をご覧のとおり本当に多種多様、千差万別。教員だけでは手が足りない場合には職員、学生も動員しての対応となっております。こうして見ると自画自賛ではありますが、まさに大学を挙げての結構な活動ぶり。これを多いと見るか少ないと見るか、あるいはお役に立っているのかどうかは皆さまのご批判を俟つばかりです。

なお本学では2019年4月1日に新潟中央キャンパスに「社会連携センター」を起ち上げ、これからも社会貢献、地域貢献に邁進して参る所存です。是非これからも本学のこうした活動にご理解を賜りますと共に、ご意見、ご要望をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

目 次

学長あいさつ	1
--------------	---

自治体との包括協定による活動

近山 英輔・河原 和好	弥彦村 土曜学習	4
中田 豊久・宇田 隆幸・山下 功	魚沼市 数学おもしろ講座	5

教員の地域連携活動

国際学部 国際文化学科

佐々木 寛・山田 裕史・小宮山 智志	国際交流ファシリテーター	8
佐藤 泰子	新潟らしい『おもてなし』とは？	9
澤口 晋一	新潟砂丘と潟に関する一連の研究	10
	西区赤塚「北国街道解説板」の作成	11
	江南区ガイドブック制作の監修	12
	「砂丘講座」と「砂丘ウォーキング講座」	13
	新潟市の潟に関する自然・文化・民俗の調査研究と魅力発信	14
アレクサンドル プラースル	日本歴史と文化	15
佐々木 寛・山田 裕史	大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2018 「松之山オープンキャンパス」における「松之山・国際理解タイム」の企画・運営	16
	岩室地域におけるローカルSDGsの実践	17
山田 裕史	新潟市・ウルサン市青年交流プログラム	18

経営情報学部 経営学科

内田 亨	若者を地元密着へつなげる試み～企業紹介冊子の作成を通して～	19
小宮山 智志	学生有志による小出商店街活性化	20
	上越市宇津俣地区情報発信事業	21
	支え合いしくみづくりワークショップ	22
小宮山 智志・山下 功	豪農の館「中原邸」・佐潟	23
小宮山 智志	うちのdeまちフォト	24
土屋 翔	児童が作成したスタンプを使った小出商店街広報活動③第31回魚沼 国際雪台戦大会(学生団体 キミノデザイン製作所、T.C.Y.Labo.)	25
藤田 晴啓・土屋 翔	デジタルエフェクツを利用した演能演出による佐渡小泊集落活性化 学生の力による集落活性化(新潟県依頼事業) 再生可能エネルギーによる離島電力自立および営農支援(共同研究)	26
藤田 美幸	スノーボード女性アスリート強化支援事業 一世界に照準を合わせた革新的教育プログラムの開発マネジメント	27
	はね茶豆をつかった6産業化プロジェクトー茶豆みそシュークリームー	28
	ハイブリッドまちあるきー ふるまちクエスト、にいがたクエストー	29
	内野商店街活性化プロジェクト	30
	「うまさぎっしり 食の大商談会」での出展企業サポート	31
	「Food Japan」での出展企業サポート	32

経営情報学部 情報システム学科

上西園 武良	使いやすいゴミ拾い用トングの開発(アルミ製)	33
河原 和好・中田 豊久	小学生向けプログラミング教室	34
河原 和好・石川 洋・小林 満男	無人飛行機(ドローン)を用いた観測	35
河原 和好	IoTによる地盤沈下の監視	36
小林 満男・澤口 晋一・小宮山 智志・土屋 翔	赤塚、新潟砂丘の魅力PR等を通じた赤塚地域の活性化	37
高木 義和	栄養計算自分の朝食レシピを作成し栄養バランスをチェックしてみよう。	38
西山 茂	青少年のための科学の祭典	39

自治体との包括協定による活動

新潟国際情報大学では「人的・知的資源の交流及び活用を図り、相互に協力して地域と大学の発展に寄与する」ことを目的に、「教育・文化の振興」、「人材育成」、「地域づくり及び産業振興」、「国際交流推進」を連携事業の柱に据え、下記の自治体との包括的連携協定を締結しました。

魚沼市



大平悦子魚沼市長 平山征夫学長
包括協定締結日：2016年5月30日(月)

弥彦村



小林豊彦弥彦村長 平山征夫学長
包括協定締結日：2017年6月22日(木)



基礎データ

- ①主な連携先：弥彦村
- ②活動地域：弥彦村
- ③活動資金：本学
- ④活動時期：2018年6月～8月
2019年6月～8月
2020年7月～8月

活動の目的

中学校1、2年生向け数学、英語の基礎力定着。

活動の経緯

2017年度に本学は弥彦村との「包括的連携協定」を締結している。2017年度に弥彦村が新潟県の「土曜学習モデル事業」を活用して土曜学習を実施した際に、本学から2名の教員と2名の学生が数学講師として参加した。2018年度～2020年度、弥彦村の土曜学習モデル事業に本学から講師派遣を行った。

活動内容

弥彦村が2018年度夏期に小・中学生向けに実施した、土曜学習（「弥彦Plan Do 塾」）に、新潟国際情報大学から2名の教員（近山英輔、河原和好）と1名の学生TA（12016159武藤巧、情報システム学科3年）が数学講師として参加した。開催場所は弥彦村総合文化会館の研修室、開催期間は、2018年7月7日から8月25日であった（全6回）。近山が前半3回、河原が後半3回を担当した。担当クラスは、中学2年の数学クラスであった。テキストは、弥彦村側で用意し、新学社「夏のレベルアップ数学2年」を使用した。中学2年クラスは6名が受講した。7/7（土）から8/25（土）まで全て土曜日に開催され、出席率は78%であった。2019年度は小学生クラスを同期間担当した。2020年度は中学3年生のクラスを担当した。

土曜学習 第5回 基本問題

中1

文字式①

氏名

【1】 次の数量を表す式を書きなさい。（数量の表し方）

(1) 1冊 a 円のノートを2冊買って、1000円出したときのおつり

$$(1000 - 2a) \text{円}$$

項目	小/中	思う	やや思う	あまり 思わない	思わない
土曜学習に参加してよかったと思う	小	13	11	0	0
来年度も参加したいと思う	小	10	13	5	1
学校の授業や家庭学習に役に立って	中	2	2	3	0
取組の様子や感想を家で話したか	小	13	10	1	0
来年度も継続したほうがよいか	中	6	5	0	0
	小	6	10	6	2
	中	2	6	3	0
	小	15	6	3	0
	中	8	4	0	0

活動成果

- ・本学と弥彦村との間で人的・知的資源の交流がなされた
- ・地域の人材育成に貢献できた。

今後の課題・目標

継続して担当する予定である。



経営情報学部 情報システム学科

近山 英輔 教授

担当科目

システム数学、データサイエンス、応用統計学



経営情報学部 情報システム学科

河原 和好 准教授

担当科目

コンピュータビジョン、プログラミング入門、プログラミング環境

魚沼市 数学おもしろ講座



基礎データ

- ①主な連携先：魚沼市教育委員会学校教育課
- ②活動：中学生に対する数学の授業
- ③地域：新潟県魚沼市
- ④活動資金：本学
- ⑤活動時期：2016年5月から12月までの
長期休暇時を除く毎週土曜日

活動の目的

魚沼市の中学生に対して、数学の授業を実施することで数学への興味を抱かせ、数学的思考能力を涵養する。

活動の経緯

2016年5月に、地域づくりや人材育成に関する包括的な協定である「新潟国際情報大学・魚沼市 包括的連携協定」が結ばれた。その一環として、魚沼市の中学生に数学を教えるという事業が白井健二先生、宇田隆幸先生、山下功先生によって立ち上げられ、同年6月4日(土)から開始され、2019年までに3年の活動を行っている。

活動内容

5、6月ごろから、12月まで毎週土曜日に、魚沼市の小出郷福祉センターで数学の授業を実施する。授業の時間は、1時間半である。担当する講師は、本学教員が持ち回りでを行い、TAとして本学学生毎週2名を参加させる。授業は、講義というよりは演習形式で、中学生は、本学の用意した数学の問題集や、学校での授業の予復習を行うこともある。参加者は、例年おおよそ15名ほどである。

さらに数学の授業だけでなく、中学生の学業および生活一般についてもできるだけサポートしている。

活動成果

- ・新聞記事に掲載(新潟日報朝刊2018年6月8日(金)付 18面)
- ・継続的参加の実現(参加する中学生は、一度参加すると次年度も続けて参加する生徒が多い。また、本活動の対象外ではあるのだが、高校生になっても参加する生徒もいる。)

今後の課題・目標

引き続き中学生に対する数学を中心とした学業サポートを続けていく。課題としては、参加者が増えたときに現在のような手厚いサポートができるかどうかである。現在の参加生徒の満足度は、講師、TAとの十分なコミュニケーションがあるからであると考えられる。この十分なコミュニケーションを保ちつつ、可能であれば、活動を拡大していきたいと考える。さらに、2020年から小学校で必修化されるプログラミングなどについても対応していきたい。



経営情報学部 情報システム学科
中田 豊久 講師

担当科目
情報論理、知識情報、人工知能



経営情報学部 経営学科
山下 功 准教授

担当科目
管理会計論、財務会計論、簿記基礎



経営情報学部 情報システム学科
宇田 隆幸 教授

担当科目
情報とコンピューティング
情報システム設計、データベース論、情報論理



教員の地域連携活動

新潟国際情報大学の国際学部、経営情報学部の教員の研究テーマや専門分野、地域貢献の観点から、自治体、団体、企業、商店街などとの連携をまとめましたのでご紹介します。

連携の対象や内容は多岐にわたっていますので、ご興味のある場合は、本学までお問い合わせください。



国際交流ファシリテーター



基礎データ

- ①主な連携先：(公財)新潟県国際交流協会
- ②活動地域：新潟県内の小中学校・高校など
本学国際学部予算および
- ③活動資金：新潟県国際交流協会予算
- ④活動時期：2006年度～現在

活動の目的

本学の学生を「国際交流ファシリテーター」として育成し、県内の小中学校・高校に派遣してワークショップ形式の国際理解教育を行うことによって、地域社会の国際化・活性化を推進する。

活動の経緯

本事業は2006年度に本学が始め、2007年度から(公財)新潟県国際交流協会と連携して行っている。文部科学省の大学教育改革補助金のひとつである「平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(略称:現代GP)に採択された。2007年度からは県内の他大学も参加し、本学、敬和学園大学、上越教育大学、新潟県立大学、新潟大学の5大学がこの事業に取り組んでいる。

活動内容

(公財)新潟県国際交流協会から「国際交流ファシリテーター」の委嘱状を授与された学生たちが県内の小中学校・高校にグループ単位で出向き、ワークショップ形式で国際理解教育を行う。国際交流ファシリテーターになるには、「国際交流ファシリテーター演習」という授業を履修し、学内外の講師による講義やワークショップ実習によって構成される研修を受ける(4～7月)。この授業の合格者は、8月に「国際交流ファシリテーター」として認定され、9月および2～3月に小中学校・高校に派遣される。こうした参加型の実践教育プログラムによって、学生は国際社会に関する基礎・専門知識を習得するとともに、コミュニケーション能力やチームワーク能力を身につけること、児童・生徒は国際社会への関心と学習意欲を高めることが、それぞれ期待される。こうした活動は、地域における国際理解教育を推進する事業として、県内の教育界から高く評価されている。

活動成果

本学学生のべ442人が国際交流ファシリテーターとして認証を受け、多くの小中学校・高校でワークショップを実施(2006～2018年度)

小中学校・高校以外の場でのワークショップ実施(新潟市と韓国ウルサン市の青年交流ワークショップ(2017年)、大地の芸術祭2018「松之山オープン・キャンパス」でのワークショップ(2018年)など)

今後の課題・目標

小中学校・高校という従来の場だけでなく、県内在住の外国人や留学生などを交えたワークショップを行う機会を増やす。



国際学部 国際文化学科

佐々木 寛 教授

担当科目

国際政治学、平和学、東アジア関係論、
グローバル・デモクラシー論



経営情報学部 経営学科

小宮山 智志 准教授

担当科目

社会学、経営情報論、行動科学、情報社会学



国際学部 国際文化学科

山田 裕史 准教授

担当科目

国際協力論、国際組織論、
国際交流ファシリテーター、
ファシリテーション実践論

新潟らしい『おもてなし』とは？



基礎データ

- ①主な連携先：新潟市 / 古町商店街 / 中央キャンパス
- ②活動：連続講座
- ③地域：新潟市
- ④活動資金：新潟市 150 周年記念事業助成金（「みなとまち新潟」市民団体等活動助成事業）
- ⑤活動時期：2018 年 11 月～2019 年 2 月

活動の目的

文化講演会「新潟らしい『おもてなし』とは？」を開講。「おもてなし」に関わる商店街や観光業の方々や市民と一緒に新潟の魅力を再発見し、新潟ならではの「おもてなし」を考える連続講座を行う。

活動の経緯

2019 年 1 月開港 150 周年を節目とし、本学と新潟市では「新潟開港 150 周年記念イベント」（市助成事業）として後期より公開講座を中央キャンパスで開催する。湊町の歴史が育む「外に開かれ、新しいモノや他所の人を受け入れるオープンマインドな精神と文化が息づくまち新潟の魅力を再発見し、新潟ならではの「おもてなし」を考える連続講座（無料）である。「新潟らしい『おもてなし』とは？ 一街の魅力再発見・もてなす心、極意を達人に学ぶ」をキーワードに 4 名の講師を迎える。

活動内容

◆日程と講師（テーマ）

第1回 11月3日（土）新潟の魅力再発見、街歩き極意
講師 野内 隆裕（路地連新潟代表）

第2回 12月1日（土）外国人観光客に日本流のおもてなしを
講師 澤 功（澤の屋旅館（SAWANOYA RYOKAN）館主・観光カリスマ）

第3回 1月12日（土）おもてなし英会話
講師 佐藤 泰子（本学国際学部 英語講師）

第4回 2月16日（土）おもてなしの心～攻めのホスピタリティ～
講師 阿部 佳（グランドハイアット東京コンシェルジュ）

◆開講時間 各回 午後1時30分～午後3時 定員 100 名

活動成果

- ・新潟市開港 150 周年記念事業として新潟市及び古町商店街組合との連携及び共同
- ・国内はもちろん、外国人客に対する「おもてなし」の取り組みについて市民・県民への啓蒙活動
- ・第 2 回講演内容が新潟日報座標軸に掲載 1 月 8 日号（鶴巻直史論説編集委員）
- ・本学のプレゼンスが高まった点

今後の課題・目標

今回の学習を更に実践活動としてつなげていくために、新潟市観光課が実施しているクルーズ船の外国人客に対する受け入れや G20 ヘアテンドガイドなど、本学学生の積極的な取り組みへの啓蒙活動と学習や活動支援が急務。また、古町商店街や万代地区商店街との関係・連携強化などが今回の連続学習から提起された課題である。今年は本学学生が G20 をはじめとする新潟市へのイベントへボランティアとして参加する機会が多くあるので、出来る限り市・県との連携強化を図っていきたい。

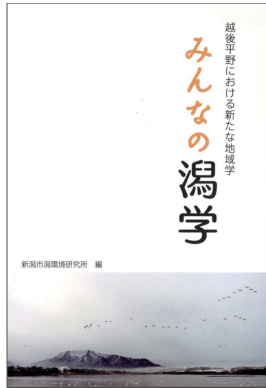


国際学部 国際文化学科
佐藤 泰子 講師

担当科目

英語基礎、観光英語、国際ビジネス英語

新潟砂丘と潟に関する一連の研究



基礎データ

- ①主な連携先：新潟市潟環境研究所
- ②活動：客員研究員として、潟研究所の業務内容に基づく調査研究とその成果発表
- ③地域：新潟市
- ④活動資金：新潟市
- ⑤活動時期：2017年

活動の目的

砂丘や潟に関して広く調査・研究を行い、潟と人とのより良い関係を探求しその魅力や価値を再発見・再構築すること。

活動の経緯

新潟市潟環境研究所からの依頼により。

活動内容

新潟砂丘の地形および新潟市内の潟や池の成因に関する調査・研究。



活動成果

- ・「新潟砂丘南西端地域の地形」。平成 28 年度 新潟市潟環境研究所研究成果報告書。115～135 ページ。2017 年 6 月。
- ・「新潟市の砂丘地にみられる湖沼とその成因」。平成 29 年度 新潟市潟環境研究所研究成果報告書。4～14 ページ。2018 年 6 月。
- ・『みんなの潟学』新潟市潟環境研究所編 分担執筆。2018 年 11 月。
- ・「佐潟と赤塚砂丘を一体化したレクリエーションゾーン構想」新潟市潟環境研究所ニュースレター第 6 号、4～5 ページ。2017 年 3 月。
- ・「佐潟と御手洗潟は砂丘湖ではない」。新潟市潟環境研究所ニュースレター第 9 号、2～3 ページ。2018 年 12 月。
- ・「異人池」について。新潟市潟環境研究所ニュースレター第 10 号、2 ページ。2019 年 3 月。
- ・新潟市潟環境研究所シンポジウム・パネリスト。2019 年 2 月 10 日
- ・新潟市潟環境研究所 2017 年度 第 1 回定例会にて報告。2017 年 6 月 5 日
- ・新潟市潟環境研究所 2018 年度 第 2 回定例会にて報告。2018 年 8 月 2 日

今後の課題・目標

新潟砂丘と潟に関する調査研究を継続し、両者に関する新たな魅力を地理学的、地形学的視点に基づいて発信し、保全の在り方や活用について提言していきたい。



国際学部 国際文化学科
澤口 晋一 教授

担当科目
地球環境論、資源とエネルギー、世界地誌、新潟研究（自然と文化）

西区赤塚「北国街道解説板」の作成

活動の目的

赤塚地域の北国街道沿いに立地する名所・旧跡・地形等の紹介を通じて地域の魅力を伝え、活性化を図る。

活動の経緯

新潟市西区農政商工課からの依頼による。

活動内容

北国街道沿いの名所・旧跡、および特徴的な地形等を見出し、その意味を看板の解説文として執筆した。

活動成果

- ・御手洗瀧湖岸の看板
- ・山崎地区 大山祇神社の看板
- ・佐潟・中道の看板

今後の課題・目標

自身の調査・研究成果をできるだけ多く一般市民に還元し、自分たちの生活基盤である地域の自然に関する理解を深めてもらうこと。

基礎データ

- ①主な連携先：新潟市西区農政商工課
- ②活動：「北国街道解説板」の文面執筆及び写真解説
- ③地域：新潟市赤塚
- ④活動資金：新潟市西区
- ⑤活動時期：2018～2019年



国際学部 国際文化学科
澤口 晋一 教授

担当科目
地球環境論、資源とエネルギー、世界地誌、新潟研究（自然と文化）

江南区ガイドブック制作の監修



基礎データ

- ①主な連携先：新潟市江南区地域課
- ②活動：制作会議での勉強会講師
およびアドバイス
- ③地域：新潟市
- ④活動資金：-
- ⑤活動時期：2017年～2019年

活動の目的

ガイドブックを通じて亀田砂丘の魅力を多面的に紹介し、郷土への理解、愛着を深めてもらうこと。

活動の経緯

新潟市江南区地域課からの依頼による。

活動内容

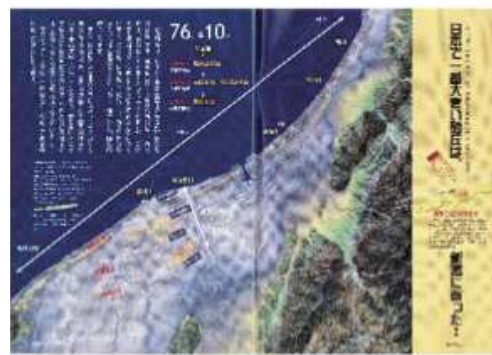
ガイドブック制作会議に際して、越後平野の発達史への亀田砂丘の位置づけ、開発による改変状況などについて講義を行うとともに、ガイドブックの内容・方向性について意見を述べた。さらにガイドブックの基本となる砂丘の分布図を作成したほか、内容についてのアドバイスをを行った。

活動成果

「亀田砂丘ガイドブック 砂丘は語る」およびその改訂版の発行。

今後の課題・目標

自身の調査・研究成果をできるだけ多く一般市民に還元し、自分たちの生活基盤である地域の自然に関する理解を深めてもらうこと。



国際学部 国際文化学科
澤口 晋一 教授

担当科目
地球環境論、資源とエネルギー、世界地誌、新潟研究（自然と文化）

「砂丘講座」と「砂丘ウォーキング講座」



基礎データ

- ①主な連携先：赤塚郷ゆかりの文人展
実行委員会
- ②活動：講演および現地観察会
- ③地域：新潟市赤塚
- ④活動資金：新潟市
「潟の魅力創造市民活動補助金」
- ⑤活動時期：2016年8月7日（講演）、
同10月16日（現地観察）

活動の目的

地域に潜在する様々な魅力を見出し、地域活性化に貢献すること。

活動の経緯

「赤塚郷ゆかりの文人展」実行委員会からの依頼。

活動内容

「砂丘講座」では赤塚地域の砂丘を中心とした自然環境の生い立ちと成り立ちについて講演した。この講演を踏まえて「砂丘ウォーキング講座」では25人の参加者とともに現地を観察しながら解説を行った。

活動成果

- ・講演：「新潟砂丘と赤塚・越前浜砂丘—その魅力と活用—」8月7日
- ・現地観察会 10月16日 約10kmを徒歩で歩きながら砂丘地形、植生を解説。

今後の課題・目標

自身の調査・研究成果をできるだけ多く一般市民に還元し、自分たちの生活基盤である地域の自然に関する理解を深めてもらうこと。



国際学部 国際文化学科
澤口 晋一 教授

担当科目

地球環境論、資源とエネルギー、世界地誌、新潟研究（自然と文化）

新潟市の潟に関する自然・文化・民俗の調査研究と魅力発信



基礎データ

- ①主な連携先：新潟市環境部環境政策課
- ②活動：新潟市里潟研究ネットワーク
会議座長として
- ③地域：新潟市
- ④活動資金：新潟市
- ⑤活動時期：2019年4月以降

活動の目的

新潟市に16残存する潟の自然・文化・民俗の調査研究を通じてその魅力を発信する。
 ラムサール条約自治体認証に向けた各種取り組み(シンポジウム開催等)

活動の経緯

新潟市環境部環境政策課からの依頼による。

活動内容

隔月ごとの定例会での情報共有、企画立案。年1回のシンポジウムの開催。
 主に潟の成り立ちに関する調査・研究とその成果を報告書あるいは一般市民向けガイドブックの作成に反映させる。



活動成果

- ・2020年12月12日シンポジウム開催予定。
- ・十二潟ガイドブックの作成。
- ・東区との連携により、じゅんさい池のガイドブックの作成(進行中)。

今後の課題・目標

新潟市の象徴でもある潟に関する調査・研究を継続し、将来的に潟をどのように活用、保全さらには存続させていくべきかを考え、提言していきたい。



国際学部 国際文化学科
澤口 晋一 教授

.....

担当科目
 地球環境論、資源とエネルギー、世界地誌、新潟研究(自然と文化)

日本歴史と文化



基礎データ

- ①主な連携先：ロシア極東（東シベリア）地域
- ②活動：講演
- ③地域：ロシア極東（東シベリア）地域
(主にウラジオストク市、ハバロフスク市、ヤクツク市)
- ④活動資金：海外出張費、献金、私費
- ⑤活動時期：2008年～継続中（年に2-3回）

活動の目的

日本文化・社会の現状と歴史の紹介

活動の経緯

活動の経緯（200字程度） 来日経験のある市民や日本の社会・文化に興味のある海外日本センターの教育を受ける受講生のための講演やワークショップ。

活動内容

- ①現代日本文化の中に見える江戸時代
- ②日本が統一した時代と現代日本人
- ③日本の教育制度刑法 等の講演。

活動成果

日本の歴史や現代社会・文化の知識を供給すること。

今後の課題・目標

日本の歴史や現代社会・文化の知識供給の継続。



国際学部 国際文化学科
アレクサンドル・プラーソル 教授

担当科目
ロシア文化論、ロシア史概説、日本文化論、ロシア語

大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ 2018

「松之山オープンキャンパス」における「松之山・国際理解タイム」の企画・運営



基礎データ

- ①主な連携先：大地の芸術祭実行委員会
- ②活動地域：新潟県十日町市松之山
- ③活動資金：本学学長裁量費およびアートフロントギャラリーからの委託費
- ④活動時期：2018年5月～8月

活動の目的

大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2018「松之山オープンキャンパス」において、本学の国際交流ファシリテーターによる「松之山・国際理解タイム」と題するワークショップを行うことで、同オープンキャンパス全体のアイスブレイクを行うとともに、松之山の国際化・活性化を推進する。

活動の経緯

アートディレクターの北川フラム氏が代表を務めるアートフロントギャラリーから依頼を受け、本学の国際交流ファシリテーター学生と同事業の推進員とともに、「松之山・国際理解タイム」と題するワークショップを企画・運営した。同ワークショップを企画するにあたり、2018年5～8月に複数回にわたって松之山を訪問し、同地域の自然や歴史を学び、地元住民へのインタビュー調査やアート作品の視察などのフィールドワークを実施した。

活動内容

2018年8月25日に松之山三省ハウスで開催された松之山オープンキャンパスのランチを兼ねたアイスブレイクとして、本学の国際交流ファシリテーターが「松之山・国際理解タイム」と題するワークショップを行った。幼児や児童から高齢者まで幅広い年齢層の参加者約80人は、松之山の食材をふんだんに使ったランチや、松之山にアート作品を展示する外国人作者の出身国のお菓子を食べながら、クイズやショートレクチャーを通じて、「アート（＝松之山に展示されている芸術作品）」や「地域（＝松之山）」、「国際（＝芸術作品の外国人作者）」への関心と理解を深めた。また、参加者の多くは県内外からの参加者であり、ワークショップは松之山の住民と地域外の人々との交流の場となった。

活動成果

- ・ワークショップは参加者の好評を博し、松之山オープンキャンパス全体のアイスブレイクとなった。
- ・「アート（＝松之山に展示されている芸術作品）」、「地域（＝松之山）」、「国際（＝芸術作品の外国人作者）」に対する参加者の関心と理解が深まった。
- ・本学の国際交流ファシリテーターにとっては、フィールドワークを実施し、現地の人々のニーズを把握してワークショップをつくりあげるといふ、新たな経験を積むことができた。

今後の課題・目標

今回のワークショップで得た人脈を通じて引き続き松之山との関係を維持し、本学独自の地域連携プロジェクトを立ち上げたい。また、今後は通常の国際交流ファシリテーター事業においても、フィールドワークに基づくワークショップづくりを取り入れる。



国際学部 国際文化学科
佐々木 寛 教授

担当科目

国際政治学、平和学、東アジア関係論
グローバル・デモクラシー論



国際学部 国際文化学科
山田 裕史 准教授

担当科目

国際協力論、国際組織論
国際交流ファシリテーター
ファシリテーション実践論

岩室地域におけるローカルSDGsの実践



基礎データ

- ①主な連携先：新潟にしかん地域循環共生圏協議会
- ②活動：岩室地域におけるローカルSDGsの実践
- ③地域：新潟市西蒲区岩室
- ④活動資金：会費および各種補助金
- ⑤活動時期：2020年度～現在

活動の目的

「地域循環共生圏」という、観光、教育、農業など地域にある資源を最大限に活用しながら環境・経済・社会を向上させ、自立した持続可能なまちづくりを目指します。

活動の経緯

岩室温泉旅館組合、岩室温泉観光協会、岩室温泉自治会、NPO法人いわむろや、(一社)おらってにいがた市民エネルギー協議会、MUSIC DROPなど、これまで岩室地域のまちづくりに取り組んできた団体に本学も加わり、2020年3月31日に「新潟にしかん地域循環共生圏協議会」が発足しました。

活動内容

本学の学生が岩室地域でフィールドワークを行ったり、地元イベントの企画や運営に携わったりしながら、地域における課題を自ら見つけ、その課題に対する解決策を岩室地域に関わる多様な人々とともに探求します。本学にとっては、「サービス・ラーニング」という新たな教育の試みとなります。

本学のSDGs推進団体「Rainbow World Project」の学生たちが、岩室地域でのフィールドワークに着手し、同地域に関わる人々との交流を始めています。また、日産自動車の協力を得て、電気自動車「リーフ」1台を2020年10月に導入しました。環境に配慮した車を、平日は学生が活動に利用し、週末は岩室地域で観光客に貸し出しています。

活動成果

- ・観光施設や旅館における本学学生によるインターンシップ実施
- ・「日産リーフ」のバッテリーを活用したSDGsカフェ出店(イベント時)
- ・海岸清掃と海洋プラスチック問題に関するワークショップによるSDGs推進活動
- ・本学学生による岩室観光協会ウェブサイトの中国語翻訳プロジェクト始動

今後の課題・目標

温泉×大学×電気自動車、観光×教育×環境を融合する全国的に類例のない新しいまちづくりを展開することで、若い世代が希望をもって活躍できる持続可能な地域社会を実現したい。



国際学部 国際文化学科
佐々木 寛 教授

担当科目

国際政治学、平和学、東アジア関係論
グローバル・デモクラシー論



国際学部 国際文化学科
山田 裕史 准教授

担当科目

国際協力論、国際組織論
国際交流ファシリテーター
ファシリテーション実践論

新潟市・ウルサン市青年交流プログラム



基礎データ

- ①主な連携先：新潟市観光・国際交流部国際課
- ②活動地域：新潟市内
- ③活動資金：本学国際学部予算および
新潟市観光・国際交流部国際課予算
- ④活動時期：2017年5月～8月

活動の目的

新潟市とその交流協定都市である韓国ウルサン広域市の青年交流プログラムを通じて、両市の友好関係を深化させ、将来的にも交流を継続していくため、学生らが交流の担い手としてかかわるきっかけを提供する。

活動の経緯

新潟市観光・国際交流部国際課から依頼を受け、本学の国際交流ファシリテーター学生と同事業の推進員とともに、青年交流プログラムを企画・運営した。2017年5月以降、新潟市観光・国際交流部国際課との打ち合わせを複数回行い、本学の国際交流ファシリテーターと同事業の推進員が中心となり、交流会やグループでの街歩きを含む2日間のワークショップを立案した。

活動内容

2017年8月5日と6日の2日間、公募によって選ばれた新潟市の大学生・専門学校生・高校生と、ウルサン市からの訪問団(大学生と高校生)とのワークショップや交流会、新潟まつり花火観覧などにおいて、本学の国際交流ファシリテーターがファシリテーションや通訳を行った。2日間にわたるワークショップでは、初日に自己紹介を兼ねたアイスブレイクとゲームを通じたグループ分けを行った後、グループごと与えられたミッションを達成すべく新潟市内を散策した。翌日にはグループごとに市内散策の結果を報告し、2日間で各自が撮影した写真を用いてグループごとにアルバムを作成した。こうしたワークショップのほかにも、新潟まつり花火観覧やイオンモールでの買い物などを通じて、両市の交流プログラム参加者は互いに交流を深めた。

活動成果

- ・ワークショップの構成が良く、かつ、ファシリテーションがうまくできたことで、最終的にはファシリテーターがいなくても両市の青年たちだけで親密な関係を築くことができた。
- ・普段は日本の児童・生徒を対象に活動している本学の国際交流ファシリテーターにとって、外国人をも対象とした今回のワークショップを成功させたことは、大きな自信となった。

今後の課題・目標

引き続き行政と連携し、留学生や新潟在住の外国人を対象にワークショップを行う機会を積極的に探していきたい。



国際学部 国際文化学科
山田 裕史 准教授

担当科目

国際協力論、国際組織論
国際交流ファシリテーター
ファシリテーション実践論

若者を地元密着へつなげる試み ～企業紹介冊子の作成を通して～



活動の目的

- ①若者に地元には素晴らしい企業があることを伝え、関心を持ってもらい地元密着へつなげる。
- ②その方法として、企業紹介冊子を作成する。

活動の経緯

内田研究室では5年ほど前に本学理事長よりNPO法人笹山縄文の里事務局長を紹介していただいた。同事務局長は地域の祭りを通して縄文の平和と共存の精神を学生に伝承し、縄文の神話を学んだ学生と祭りを盛り上げたいと思っていた。一方、内田研究室の卒業研究生も社会とのつながり、地域への理解・貢献、をしたいと考えていた。そこで両者がwin-winの関係になるよう地域との連携を始めた。こうした文脈の中、毎年6月第1週の日曜日に行われる「笹山じょうもん市」と呼ばれる地域のお祭りに出店者側としての参加をした。

さらに十日町市の民宿をアピールする冊子作成に取り組んできた。民宿紹介冊子が好評だったため十日町市中条地区を紹介する冊子の続編を作成してほしいと先方から依頼が来た。そこで今回企業編ということで冊子の作成に携わることとなった。

活動内容

今年度は、内田研究室3年生の佐藤紘子、加藤大和、鈴木尊就、渡辺将広が実際に現地に行って十日町市中条地区の会社社長にお会いし、取材を行った。その主な取材内容としては会社の商品紹介や技術紹介、また社長からの自社の製品や若者への思いを聞くことができた。この取材は先方と学生の予定を合わせる事が難しいこともあり1年という時間を費やした。その1年の間に7回の取材を行うことができた。さらにこの活動から新潟国際情報大学の中央キャンパスで行われたCOC+の「インターンシップ地域活動フォーラム」でのシンポジウムにおいて発表し、様々な企業、大学関係者、他大学生と意見交換を行うことができた。

基礎データ

- ①主な連携先：NPO 法人笹山縄文の里、中条地区振興会
中条農商工れんらく会
- ②活動：フィールドリサーチによる現地取材
- ③地域：新潟県十日町市中条地区
- ④活動資金：新潟県中越大震災復興基金
(地域復興支援事業)
及び十日町市（パワーアップ事業）、
学長裁量費、個人研究費
- ⑤活動時期：2018年3月～2019年3月

活動成果

- ①地方企業の魅力の再発見と若者への啓発
- ②十日町市との連携強化
- ③学生にとって様々な世代の人々と会話することによるコミュニケーション力の向上
- ④『ちょこっと十日町 企業編』
- ⑤『経営学インタビュー調査』（ゼミで使用する教科書のようなブックレット）

今後の課題・目標

- ①今後の課題はどのようにして今回作成した冊子を認知してもらおうかを考えなければならない。
- ②今後の目標としてはもっと多くの若者の目に触れるように紙媒体だけでなく電子媒体での伝え方を学び、より私たちが紹介する企業の認知度を高めたいと考える。



経営情報学部 経営学科
内田 亨 教授
担当科目
経営管理論、経営組織論

学生有志による小出商店街活性化



基礎データ

- ①主な連携先：魚沼市総務政策課地域創生課
魚沼職人大学小出キャンパス（商店街活性化団体）
- ②活動：ワークショップ開催・コースターのデザイン
- ③地域：小出商店街
- ④活動資金：魚沼市委託事業
- ⑤活動時期：2018年一継続

活動の目的

- 魚沼市の委託事業として小出商店街の団体である「魚沼職人大学小出キャンパス（以下「魚沼職人大学）」のイベント、「学園祭」（11月10日土曜日開催）において以下の3点の目的の達成することを目的した。
- ・商店街の認知度向上
 - ・大学生ならびに商店街の資源：空き店舗の活用
 - ・地元高等学校との連携

活動の経緯

魚沼職人大学様からお声がけいただき、6月に魚沼市役所小出庁舎にて代表の方と面談し、以下の本大学との連携プランをお聞きした。

- A. 大学生と連携した「売れる」商品の開発と発信
- B. 「魚沼職人大学 学園祭」の共同開催
- C. 商店街マーケティング
- D. 商店街での店舗出店（空き店舗活用）

早速、次回の魚沼職人大学（7月）に参加させていただき、今年度は今後の発展性を考慮しプランBを実施することとなった。学内で有志を募り、8月には候補の学生（有志）と現地調査、ならびに魚沼職人大学で説明をお聞き、学生の発案により以下の「5.活動内容」を実施した。

活動内容

飲食店が多いことに着目し、そこで地元の児童・生徒が作成したオリジナルコースター（以下「小出コースター」）を活用してもらうことで、地域内外に小出郷の魅力を再認識してもらい、商店街全体の活気に結び付けることを企画・実施した。具体的な内容を以下に箇条書きにする。

- ・「小出コースター」を作成するワークショップを「学園祭」で開催（空き店舗活用）
- ・ワークショップ参加者が小出のことをイメージしたスタンプを作成
- ・それらのスタンプをコースターに押し、小出コースターをデザインしてもらう。
- ・ワークショップには地元高校生（小出高校）にもボランティアとして協力
- ・「学園祭」の雰囲気を醸成という目的達成のために、本学軽音部による弾き語りを実施
- ・コースターのみならず、Tシャツやトートバッグにも参加者がオリジナルなデザインを行うワークショップも開催した。あらかじめ何種類かシルクスクリーンを用意し、スタンプと組み合わせでデザイン可能とした。

活動成果

- ・当日参加人数：60名
- ・地域の飲食店にスタンプ活用に協力いただけたのは20組
- ・当日、高校生9名がボランティアとして参加
- ・この取り組みは新潟日報などのメディアで大きく取り上げられた。
- ・2019年2月19日に新潟国際情報大学中央キャンパスでNIIGATA COC+主催によるインターンシップ・地域活動フォーラムが開催され、その中で本研究・調査のことを発表

今後の課題・目標

商店街でコースター活用促進を図るとともに、地域の小学校等でのワークショップを実施し、定着を目指していきたいと考えている。さらにコースター以外の開発（コイントレーなど）や、ほかの地域での実施も検討していきたい。



経営情報学部 経営学科
小宮山 智志 准教授

担当科目

社会学、経営情報論、行動科学、情報社会論

上越市宇津俣地区情報発信事業



基礎データ

- ①主な連携先：上越市企画政策課・上越市牧区総合事務所
新潟県総務管理部地域政策課
- ②活動：地域の活動の情報発信
- ③地域：上越市宇津俣地区
- ④活動資金：新潟県「大学生の力を活かした地域活性化事業」
- ⑤活動時期：2018年一継続

活動の目的

宇津俣は中山間地に位置し、16世帯、高齢化率約40%の小集落であるが20年以上前から農業法人化し、6次産業化、農業ブランド化、内水面でのエビの養殖などの先進的な取り組みを実施している。さらに若者の定住化が行われるなど、今後の日本の少子高齢化の問題の解決の参考になると思われるため、研究室の学生と共に、この地域の情報発信のサポートをさせていただき、さらなる地域の産物の販売促進対策の検討を行った。

活動の経緯

2018年2月に主に公務員が参加する研究会、OMO Niigata Vol.1 (OMOとは“One for a Million a Million for one”の略)に参加し、そこで宇津俣地域の取り組みをお聞きした。3月に現地を訪れ農事組合法人代表の佐藤健一さんのお話をお伺いし、4月より学生ともに活動内容を検討、同月に新潟県の「大学生の力を活かした集落活性化事業」に応募し、採択され以下の「5.活動内容」を実施した。

活動内容

9月に10日間、宇津俣地域においてほぼ全戸加入である農事組合法人を中心に、地域の産業について現地調査を実施し、情報収集を行った。同時に11月、2月の同地域での販売促進イベントでの協力体制について協議した。その中で地域の小学校との連携の可能性についてご提案をいただいた。これらの調査の結果、いままでは同地域においてあまり行われていなかった若者向けSNSでの発信を実施することにした。

販売促進イベントを取材しその様子を若者の利用が多いSNS (Instagram) に投稿すること、また小学6年生のクラスにおいて写真撮影のワークショップを実施し、彼らの撮影した写真も定期的にSNSにアップする体制を構築した。わずか2回のワークショップであったが、小学生の吸収力は我々の想像をはるかに超えており、一般的な大学生と遜色ないレベルに達した。

さらにこれらの活動を販売促進につなげるために、新潟市内で9店舗、居酒屋を経営するオーナーに宇津俣の食材を使ったフェアについて提案した。また新潟市内の祭で販売するために祭の実行委員に提案し、大筋の合意を得た。

活動成果

- ・先進地域であるがSNSによる発信(特に若者向け)が弱いことを明らかにした。
- ・地域の小学校にて写真撮影に関するワークショップを開催し、継続的な投稿体制の構築を試みた。
- ・比較的知名度が浸透していない新潟市内での販売を企画・提案した。

今後の課題・目標

我々の提案した新潟市内での販売促進対策の実現と、継続的なSNS投稿体制の確立を目指していく。そのために、この先進地域の情報を発信していくメンバーの輪を本学以外の教育機関、そして報道各社に広げ、関係人口の拡大に努めていく所存である。



経営情報学部 経営学科
小宮山 智志 准教授

担当科目

社会学、経営情報論、行動科学、情報社会論

支え合いしくみづくりワークショップ



基礎データ

- ①主な連携先：西区役所農政商工課・新潟看護医療専門学校
西区社会福祉協議会・新潟市地域包括支援センター赤塚ほか
- ②活動：支え合いしくみづくりのための活動を企画から実施まで地域の方と一緒に活動
- ③地域：みずき野キャンパス周辺
- ④活動資金：参加者負担
- ⑤活動時期：2018年一継続

活動の目的

地域にお住まいの方と学生とで、お互いに安心安全に、もっと楽しく過ごしていくために何ができるのか、話し合い、そして意気投合したメンバーでアクションを起こすことを目的としたワークショップである。

活動の経緯

赤塚・内野・中野小屋地域の地域支え合い推進委員、社会福祉士、社協、西区役所健康福祉課、新潟看護医療専門学校、新潟国際情報大学などの地域に根差す組織の「有志」が集まり「できる範囲の地域課題の解決」を自主的に行うしくみづくりを開始した。現在は地域の方々、そして福祉関係の企業の方（小規模多機能ホーム桜井の里あかつかの家・株式会社ヒロセの介護・うちの介護用品レンタル株式会社）も加わっている。

活動内容

2018年6月20日に第一回のワークショップを本学国際交流センターで開催した。120名の方にお集まりいただき、「地域の安心安全・居場所づくり・健康づくり・地域を知る」のテーマに分かれて話し合った。今年度の取り組みとしてワークショップにおいてもっとも関心が高かった「健康づくり」に関して新潟看護医療専門学校、新潟国際情報大学の学生が中心となり「健康づくりイベント」を半年間かけて企画し、2019年3月17日（日）みずき野キャンパスの体育館で本学、新潟看護医療専門学校、地域の福祉関係の企業、行政（後援：新潟市西区健康福祉課）の方々のご協力で健康づくりイベントを開催した。

小学生から高齢の方まで55名の地域の方々にご参加いただき、新潟看護医療専門学校による健康チェック・ツボ押し・健康体操、西地域保健センターによる健康講座（新大生も協力）、にいがた骨髄バンク応援団のブース、地域の方によるゲーム、そして本学フィットネス研究部が、健康に関心を持ち、運動するきっかけとなる“トレーニング体験”を実施した。継続的な開催、本学施設利用による運動の継続などの多くの声をいただいた。

活動成果

- ・2018年6月より月一回のペースでワークショップ・懇親会の開催
- ・2018年12月 越後赤塚駅前にイルミネーション設置
- ・2019年3月 健康づくりイベント（西区健康福祉センター）

今後の課題・目標

ワークショップを重ね、できる範囲の地域課題を解決するしくみを増やしていきたいと考えている。また近隣の様々な地域の活動と連携を模索している（赤塚で開催されている子供が実施するカフェや中野小屋地区で行われている冬休みの宿題を行う会など）。



経営情報学部 経営学科
小宮山 智志 准教授
担当科目
社会学、経営情報論、行動科学、情報社会論

豪農の館「中原邸」・佐潟



基礎データ

- ①主な連携先：中原邸保存会・佐潟と歩む赤塚の会
赤塚・佐潟ボランティアガイド
新潟市西区農政商工課
- ②活動：イベント開催
- ③地域：新潟市西区赤塚
- ④活動資金：-
- ⑤活動時期：2008年一継続

活動の目的

赤塚地域の魅力発信のお手伝い

活動の経緯

当時の佐潟水鳥湿地センターの職員の方からお声がけいただき、赤塚地域の活動に学生と共に参加するようになった。その後、中原邸保存会、佐潟と歩む赤塚の会、赤塚・佐潟ボランティアガイドの皆様により10年間、多くの学生の成長を暖かく見守っていただき活動を継続した。また2012年、2015年には本学を会場にボランティアガイド養成講座を開催していただいた。

活動内容

赤塚地域の豪農の館「中原邸」は春夏、年二回、一般公開される。その際に表千家茶道部・裏千家茶道部によるお茶会の開催や、吹奏楽による演奏会などを実施した。中原邸近傍の湖畔である「佐潟」では春の桜まつり、夏の佐潟まつりが開催されるが、裏千家茶道部の野点や屋台村への参加などを行ってきた。また中原邸保存会の10周年の総会(2018年6月)では講演を担当させていただき、今年度の総会では「中原邸の楽しみ方」と題したパネルディスカッションのファシリテーターを担当する。

活動成果

- ・地域の魅力発信の一助
- ・大学生の地域への関心向上

今後の課題・目標

- ・さまざまな学生に声をかけ、継続して共に参加していきたい。



経営情報学部 経営学科
小宮山 智志 准教授

担当科目
社会学、経営情報論、行動科学、情報社会論



経営情報学部 経営学科
山下 功 准教授

担当科目
管理会計論、財務会計論、簿記基礎

うちの de まちフォト



基礎データ

- ①主な連携先：内野商店街活性化ワーキングチーム
新潟市西区農政商工課
- ②活動：空き店舗を活用した写真展の開催
- ③地域：内野町
- ④活動資金：平成29年度商店街活性化ステップアップ事業
- ⑤活動時期：平成30年3月16日～31日

活動の目的

内野商店街活性化

活動の経緯

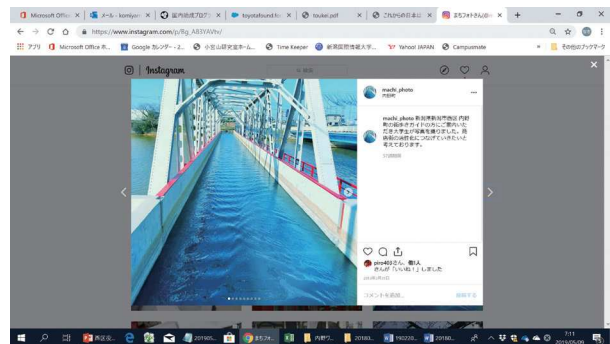
大学生に協力を呼びかけ、若い感性とまち歩きガイドの方の知識のコラボレーションにより、新しい街の魅力を映し出し、街の内外に発信し、商店街の活性化の一助となることを目的とした。

活動内容

内野町のまち歩きガイドの方に本学、ならびに他大学の学生を案内していただき、内野町を題材とした写真撮影会を実施した。その写真を利用して、地域の空き店舗において、写真展を1週間開催した。内野町の中心部である四つ角の一角が空き店舗となっているが、シャッターを上げることで街のイメージを明るくするとともに、大学生の視点による写真によって、まちの魅力を再発見してもらうことを目指した。さらに写真を用いたワークショップを地域で開催した。

活動成果

- ・空き店舗活用
- ・地域の内での魅力再発見
- ・地域外にまちの魅力の発信
- ・近隣の大学生(本学・他大学)に地域への関心向上



今後の課題・目標

他の地域を含めて、継続的に開催していきたい。



経営情報学部 経営学科
小宮山 智志 准教授

担当科目
社会学、経営情報論、行動科学、情報社会論

児童が作成したスタンプを使った小出商店街広報活動@第31回魚沼国際雪合戦大会 (学生団体 キミノデザイン製作所、T.C.Y.Labo.)



活動の目的

第一義的には児童の地元に対する意識改革を目的としている。第二義的には、小出商店街の広報活動として行なっている。前者は、地元に住んでいるが故に地元を知らないことが多い。スタンプとして具体化することにより、地元に対する思いを向上させる。後者は、その児童が作成したスタンプを元にコースター作りを行なった。コースターへのスタンプ押しは、雪合戦に来たお客さんにやってもらい、持ち帰ってもらった。児童から他多数への小出發信を行い、小出を知ってもらうよう努めた。

活動の経緯

小宮山先生が担当なされた職人大学の系譜から、第31回魚沼国際雪合戦大会の一角を借りて小出の情報発信を行なった。今回は突発的ではあったが、今後、冬に留まらず、一年中小出近辺に多様な人が訪れるシステムを構築する予定である。

活動内容

今回は、小出商店街近辺に住んでいる児童に作ってもらったスタンプをコースターに押してもらい、情報発信を行った。小出商店街の名物をスタンプ化したり、地元児童が好きなものをスタンプ化し、コースターとして拡散した。多くの県外、国外の方に小出に関する情報を提供することができた。

地域の祭りにも出店し、積極的に地域との絆を築こうとしている。



基礎データ

- ①主な連携先：小出商工会議所
- ②活動：児童に作ってもらったスタンプ（小宮山智志先生の職人大学活動）を使い、コースターにデザインをする。児童の地元に対する意識改革と小出商店街の広報活動を中心としている。
- ③地域：魚沼市小出郷文化会館（第31回魚沼国際雪合戦大会）
- ④活動資金：個人研究費
- ⑤活動時期：2019年2月以降継続

活動成果

遠方から来ていただいた方から「来年もくるよ」「小出商店街にいくね」というつながりを強く感じることができた。今後とも、小出商店街と親密に連携をとっていくことを確認した。

今後の課題・目標

より継続的に調査、活動支援を行うためには、制度化されたなかで資金的援助を必要とする。資金確保のため現在、7月27日羽根川感謝祭、8月25日小出祭りにタピオカミルクティーを出店予定。今後、小出をより公に発信していくには、通年的に多くのシステム構築をする必要がある。



経営情報学部 経営学科

土屋 翔 講師

担当科目

経営学入門、経営戦略

デジタルエフェクツを利用した演能演出による佐渡小泊集落活性化 学生力による集落活性化（新潟県依頼事業） 再生可能エネルギーによる離島電力自立および営農支援（共同研究）



基礎データ

- ①主な連携先：藤田晴啓・岡崎和也（小泊公民館長）
- ②活動：企画、学生による能デジタルエフェクツ製作、イベント準備・撤収手伝い、再生可能エネルギーによる営農支援と調査（共同研究）
- ③地域：佐渡市羽茂小泊
- ④活動資金：佐渡市地域おこしチャレンジ事業、本学佐渡プロジェクト、学生の力.. 事業
- ⑤活動時期：2012年以來継続

活動の目的

毎年稲収穫後に実施される村社祭にて演能が行われ、デジタルエフェクツを加えることにより、視覚効果を加味し、地域活性化につなげる。

活動の経緯

佐渡市が2012年公募した大学発地域活性化政策案に小泊集落能舞台活用による活性化を提言し、応募した多くの大学案から最優秀賞を獲得して以来、地元+大学のマッチング予算と、研究室単位での合宿や、集落活性調査を行なっている。

活動内容

集落の形成の歴史と能舞台活用に関する質問調査、集落長老の歴史に関する講話、デジタルエフェクツによる毎年の奉納能上演共同公演、太陽光水力ハイブリッド発電による離島電力自立と営農支援。

活動成果

- ・大学発佐渡夢プロジェクト優秀賞(2012)
- ・新潟県依頼調査報告書(2014)
- ・佐渡プロジェクト演能発表会(2016)
- ・新聞・テレビ報道



今後の課題・目標

地域活性に貢献できる学生合宿費用負担を捻出できるシステムを構築すること。



経営情報学部 経営学科
藤田 晴啓 教授
担当科目
社会情報システム、地域情報システム



経営情報学部 経営学科
土屋 翔 講師
担当科目
経営学入門、経営戦略

スノーボード女性アスリート強化支援事業

—世界に照準を合わせた革新的教育プログラムの開発マネジメント—



活動の目的

- ・若年化している日本のスノーボードスロープスタイル・ビッグエアの競技において、成長期の女性アスリートが抱える女性特有の課題に関する正しい知識を得ることにより、課題解決に必要な体制を整備すること。
- ・国際競技力の向上、国内における女子競技者層の拡大に資する競技会・教育プログラムを提供すること。

活動の経緯

全日本スキー連盟より本事業の外部評価者として委託されたことによる。

活動内容

2018年9月から2019年3月まで日本全国から小学5年から高校生までの参加者を募り、課題解決のための教育プログラムを合宿形式で4回実施した。プログラムは、成長期の女性アスリートが直面する栄養、心理、身体などに関する内容であり、くわえて、保護者、地域指導者にもプログラムを公開することで、外部環境の整備を推進した。



基礎データ

- ①主な連携先：(公財)全日本スキー連盟
(独)日本スポーツ振興センター
東北クエスト、富山キングス
スノーパーク尾瀬戸倉
猫魔スキー場他
- ②活動地域：宮城県、富山県、福島県、群馬県
- ③活動資金：(独)日本スポーツ振興センター
委託事業
- ④活動時期：2018年—継続

活動成果

- ・本事業に参加した選手から、2019-2020シーズンの強化指定選手基準をクリアした候補選手が3名、2019年ジュニア世界選手権派遣候補選手が2名輩出された。また、他の参加者も短期間で競技力が向上できた。
- ・日本で初めてスノーボード女性アスリートの強化支援の教育プログラムを開発したことで、日本のスノーボード競技に貢献できた。
- ・活動地域でのスノーリゾート、施設などで長期間にわたり本事業を実行することで賑わいを創出できた。

今後の課題・目標

今後も、本事業を継続して実施することで、2022年北京オリンピック、2026年冬季大会、それ以降も、金メダルを含む複数メダルを獲得し、継続してメダルの獲得ができる種目になること。

本事業をモデルとして一般化し、男性や他種目を対象としたプログラムを構築すること。



経営情報学部 経営学科
藤田 美幸 准教授

担当科目
マーケティング、起業論

はね茶豆をつかった6産業化プロジェクトー茶豆みそシュークリームー



基礎データ

- ①主な連携先：新潟農業・バイオ専門学校、新潟市南区
- ②活動地域：新潟市
- ③活動資金：個人研究費
- ④活動時期：2016年4月-2018年3月

活動の目的

- ・新潟産の農産物を活かしたビジネスを提案し、地域資源の価値を創出すること

活動の経緯

目的を達成するため、新潟国際情報大学の経営コースの学生と新潟農業バイオ専門学校の学生のそれぞれの知識を共創しビジネスプランを提案することとした。

活動内容

2016年4月から2018年3月まで、新潟県産の農産物についてフィールドリサーチを行い、農産物は廃棄物が多いことがわかった。その廃棄物の中で、新たな価値を創出できるか検討した結果、「えだ豆」の「はね豆」を主材料とし味噌づくりを行い、その味噌をつかった「茶豆みそシュークリーム」を製作するビジネスプランを提案した。試作や実験を繰り返し、試作品は黒埼まつりや学園祭などでテスト・マーケティングを実施するまでにいたった。またビジネスプランコンテストに応募し、優秀賞を受賞した。

活動成果

- ・2016年 新潟市南区主催「農産物をつかったビジネスプランコンテスト in 南区」アイデア部門優秀賞受賞
- ・2016年 新潟市西区主催 くるさき茶豆 夏の陣 出展、ポスター発表
- ・2016年 新潟農業バイオ専門学校 学園祭 ポスター発表、テスト・マーケティング実施
- ・2017年 味噌チップ製作など新商品開発研究
- ・学生の交流推進、ビジネスプランの創出

今後の課題・目標

- ・本学と他学の各々の知見を共創したビジネスプランを創出するためのシステムを構築をする必要がある。



経営情報学部 経営学科
藤田 美幸 准教授

担当科目
マーケティング、起業論

ハイブリッドまちあるきー ふるまちクエスト、にいがたクエストー



活動の目的

- ・新潟市の地域資源に新たな価値を創出すること。
- ・予防医療の観点から、無意識下において歩行数を増加させること。

活動の経緯

地方の中心市街地の空洞化についてリサーチ後に、教員のスポーツ・健康マネジメントに関する知識および知見から「ハイブリッドまちあるき」のビジネスモデルを提案し、学生が中心となって実行している。

活動内容

2016年から、新潟市中央区古町地区、沼垂地区にてハイブリッドまちあるきを実施した。参加者は延べ250名である。スマートフォンや地図を片手にクイズに挑戦しながら、まちあるきを実施するビジネスモデルを構築した。IT企業、デザイン企業、自治体、地元のコミュニティ協議会、商店街と協力して運営することで、学生のコミュニケーション能力を養い、現場で学ぶ力を養っている。



経営情報学部 経営学科
藤田 美幸 准教授

担当科目
マーケティング、起業論

基礎データ

- ①主な連携先：シアンス、タブロ
グラフィックデザイン
沼垂テラスオフィス
新潟市中央区地域課
沼垂地区商店街
新潟市中心市街地共同組合
北越高等学校
- ②活動地域：新潟市中央区 古町地域、沼垂地域
- ③活動資金：個人研究費、電気普及通信財団、
新潟市中央区地域課、
経営情報学部共同研究費
- ④活動時期：2016年一継続

活動成果

- ・「ハイブリッドまちあるき」という新たなまちあるきのビジネスモデルの構築し提案。
- ・参加者は新潟市内外から10代から60代まで多世代に渡り多くの方々が参加し、当該地域の新たな魅力を発見。

今後の課題・目標

- ・新潟市の地域資源のコンテンツになること。
- ・継続して活動できるようなシステムを構築すること。



内野商店街活性化プロジェクト



基礎データ

- ①主な連携先：新潟市西区自治協議会、
内野商店街、内野商工会
- ②活動地域：新潟市西区内野地区
- ③活動資金：個人研究費、
新潟市西区自治協議会委託事業
- ④活動時期：2016年4月～2017年3月

活動の目的

- ・内野地域商店街の現状と問題点の把握と活性化への提案を学生が中心となって実行すること。

活動の経緯

新潟市西区自治協議会の要請を受け目的を達成するべく活動を行った。具体的には、内野地域商店街の現状と問題点を把握するため、当該地域商店街においてインタビュー調査、アンケート調査、および調査結果分析した。その後、調査結果に基づき若年層の来街頻度を増加する提案を実行した。

活動内容

2016年～2017年の2年間で、アニメ好きな若年層をターゲットとしコスプレイベントを開催した。コスプレイヤーだけでなく、カメラマンの来街者を募った。この背景には、新潟市は参加者が約3万人の「ガタフェス」というアニメのイベントが定期的に開催されており、潜在需要が多いことに起因する。そのため、ターゲットを絞り、効果的なマーケティングを実施した。たとえば、地域の商店街と協力し、参加者への店舗の来訪を促進するための割引券などの施策を行った。また、2017年1月には、当該地域にある「まちづくりセンター」のイルミネーションを設置し、イルミネーションスポットとして広く紹介し来街者を募った。

活動成果

- ・学生が中心となって、行政、商工会、商店街の地域の潤滑油となり提案をまとめ、イベントを運営した。
- ・参加者は新潟市内外、県外、10代から60代まで多世代に渡り多くの方々が参加し、当該地域を訪れ、賑わいを創出した。

今後の課題・目標

- ・一過性のものでなく継続して活動できるようなシステムを構築すること。



経営情報学部 経営学科
藤田 美幸 准教授

担当科目
マーケティング、起業論

「うまさぎっしり 食の大商談会」での出展企業サポート



活動の目的

- ・ 学生が経営学の実践的な知識を身につけること
- ・ 学生の対人関係・社会協調性の向上、コミュニケーション能力の向上をはかること
- ・ 学生の地域企業の地域社会での役割理解と、視野の拡大をはかること

活動の経緯

にいがた産業創造機構が窓口となり、首都圏における新潟県内企業の市場開拓を推進している。その商談会に同行し、企業の商談会業務のサポートを実施した。

活動内容

2017年より、学生が経営学の実践的な知識を身につけることを目的に、東京都池袋サンシャインシティで開催される食の大商談会への出展企業から数社を選定し、経営者やマーケティングにインタビューを実施。経営理念や商品概要を学んだ後に展示会へ同行。展示会では企業のサポーターとなりバイヤーなどとのB to Bの商談会を体験した。また商品についてのテスト・マーケティングを行い、各企業へフィードバックを実施した。

基礎データ

- ①主な連携先：にいがた産業創造機構、新潟県内企業
- ②活動地域：新潟県内、東京都池袋サンシャインシティ
- ③活動資金：個人研究費
- ④活動時期：2017年ー継続

活動成果

- ・ 学生が県内外で企業と交流しながら、理論と実務の両方を学んだ。
- ・ 企業は、若年層に対する商品理解を促進できた。

今後の課題・目標

- ・ 学生は、企業が大学生の世代に向けた商品についてのテスト・マーケティングを積極的にサポートする。



経営情報学部 経営学科
藤田 美幸 准教授

担当科目
マーケティング、起業論

「Food Japan」での出展企業サポート



活動の目的

- ・ 学生が経営学の実践的な知識を身につけること
- ・ 学生の対人関係・社会協調性の向上、コミュニケーション能力の向上をはかること
- ・ 学生の地域企業の地域社会での役割理解と、視野の拡大をはかること

活動の経緯

わが国では、食産業においてアジア市場開拓を実施している企業についてJETROを中心にアジア最大の商談会を実施し新潟県では、にいがた産業創造機構が窓口となっており、新潟県内企業の出展をとりまとめ市場開拓を推進している。その商談会に同行し、にいがた産業創造機構や企業の商談会業務のサポートを実施した。

活動内容

2017年より、学生が経営学の実践的な知識を身につけることを目的に、シンガポール国際展示場で開催される「Food Japan」というアジア最大の食の展示会に同行。Food Japanは、全国から約300社が出展し、新潟県の企業は約10社が出展している。JETROシンガポールなどへアジア市場へのインタビュー調査や、情報交換を実施。展示会では、新潟県内企業やにいがた産業創造機構のサポートを行った。



経営情報学部 経営学科
藤田 美幸 准教授

担当科目
マーケティング、起業論

基礎データ

- ①主な連携先：にいがた産業創造機構、新潟県内企業
- ②活動地域：新潟県内、シンガポール
- ③活動資金：新潟県
(県内大学生等の県内定着促進事業)
- ④活動時期：2017年ー継続

活動成果

- ・ 学生は、アジア市場の視点から新潟県内の企業活動について学習を深めた。
- ・ 企業、シンガポール県人会などと学生の交流を図ることができた。
- ・ 学生は、本事業で学んだ概要を、他大学を含む学生や社会人約350名に対し発表する機会を得た。

今後の課題・目標

- ・ 学生がアジアや世界からの視点を持ち、新潟県内企業への理解が深まるようなシステムを構築する。



使いやすいゴミ拾い用トングの開発（アルミ製）

活動の目的

高齢者や子供でも使いやすいゴミ拾い用トングを開発する。

活動の経緯

2017年度燕三条ものづくりメッセの本学ブースにいがた産業創造機構の担当者が来訪。(有)永塚製作所にて軽量なアルミ製トングを開発しているが、使いやすさの評価ができず困っているとの相談有り。後日、(有)永塚製作所の担当者が本学を訪問し、詳細説明を実施。結果、上西園研究室にて人間工学的な支援が可能と判断されたので、協業を開始。現在までに数種の試作トング（アルミ製）の評価実験を行い、これに基づく改良提案を行い、トングの改良に成果を挙げている。尚、2018年度からは、(有)永塚製作所が新潟県の補助金を獲得し、本学への委託研究として実施中。

活動内容

- ・試作トングの人間工学的評価
- ・評価に基づく改良提案

活動成果

- ・アルミ製軽量トングの設計完了
(2019年春に発売開始予定)
- ・学会発表:「トングの使い易さ向上に関する研究」2018年度日本人間工学会東海支部研究大会(2018年10月20日、三重大学)



改良品：アルミ製（150g）



従来品：ステンレス製（260g）

基礎データ

- ①主な連携先：(有)永塚製作所（三条市）、NICO
- ②活動：表記のトング開発にあたり人間工学的評価、評価に基づく改良提案
- ③地域：新潟県
- ④活動資金：新潟県補助金
- ⑤活動時期：2017年一継続

今後の課題・目標

- ・トングのさらなる使いやすさの向上
- ・トングの力学モデルの確立による設計の支援



実験状況



経営情報学部 情報システム学科

上西園 武良 教授

担当科目

ヒトの情報処理、科学と技術、人間工学

小学生向けプログラミング教室



活動の目的

プログラミングを楽しみながら学習し体験してもらう。

活動の経緯

2020年度から小学校においてプログラミング教育の必修化となり、プログラミング教育の関心が高くなったため、地域貢献として生徒にプログラミングの体験をしてもらうことを企画し、中央キャンパス企画室片桐さんを中心に、2016年度から様々な形で実施してきた。

活動内容

小学生にプログラミングを体験してもらう。具体的には、Viscuit(ビスケット、低学年向け)、Scratch(スクラッチ、高学年向け)などのプログラミングツールと、中田先生が開発した迷路を脱出するプログラミング学習ゲームを用いている。大学独自で実施するものと「ニイガタSKYスクール」の講座として実施するものがある。また、別のイベント(がたまるプログラミングキャンプ)に協力する形で実施したものもある。

基礎データ

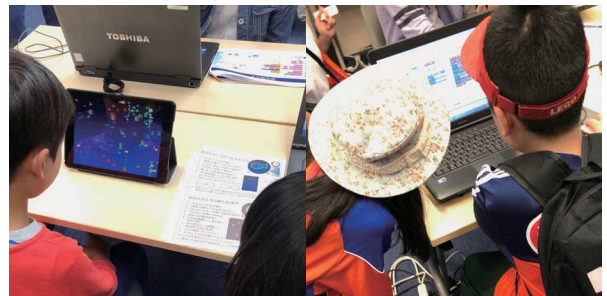
- ①主な連携先：新潟市および周辺の小学校
- ②活動：プログラミングを楽しみながら学習し体験してもらう
- ③地域：新潟市、弥彦村
- ④活動資金：本学
- ⑤活動時期：2016年度一継続

活動成果

- ・2016年度 大学で2回実施
- ・2017年度、2018年度、2019年度「ニイガタSKYスクール」の講座として実施
- ・2017年度「がたまるプログラミングキャンプ」に講師として参加
- ・2018年度・2019年度 新潟市・弥彦村の小学生を対象に実施
- ・2018年度 冬休みと春休みに実施
- ・2019年度 NST川まつりにブースを出展

今後の課題・目標

- ・教室に参加してくれた生徒をフォローするために、経験者向けの教室を実施する
- ・2020年度のプログラミング教育必修化に向けて、教員向けの体験会・説明会の実施
- ・ロボ活でも行っているロボットを用いたプログラミングや、ロボットカーなど、実物を動かすようなプログラミング体験教室の実施



経営情報学部 情報システム学科
河原 和好 准教授

担当科目
コンピュータビジョン、プログラミング入門
プログラミング環境



経営情報学部 情報システム学科
中田 豊久 講師

担当科目
情報論理、知識情報、人工知能

無人飛行機（ドローン）を用いた観測



基礎データ

- ①主な連携先：佐潟水鳥・湿地センター
- ②活動：佐潟周辺の環境調査および白鳥のカウント等
- ③地域：新潟県内
- ④活動資金：個人研究費
- ⑤活動時期：2018年度一継続

活動の目的

ドローンの撮影機能を用いて、佐潟周辺の環境や白鳥の飛来数などを調査する。地上からも観測は行われているが、より効率よく観測することが可能であり、データベースとして作成することが出来、時間変化などより細かい調査が可能である。さらに、水田の状態調査や、駐車場の台数カウントなども行った。

活動の経緯

2018年度近藤先生が中心となり、ドローンの撮影機能を用いた観測を新潟国際情報大学の売りにすることができないかというプロジェクトを立ち上げた。ドローンの手配と共に国交省への申請を行い、新潟県内の目視外飛行等が認められた。教職員と学生は操縦練習を行い、一定時間をクリアし前述の県内飛行可能なメンバーとして登録申請した。

活動内容

ドローンの飛行に関する必要な手続きの登録申請を行うとともに、教職員と学生は必要とされる時間数のドローン操縦練習の練習を行った。佐潟の観測と共に水田の観測も行った。観測データの分析も行った。

活動成果

- ・国交省によるドローン飛行の認可および操縦者の登録
- ・佐潟の白鳥の撮影、水田の撮影、等
- ・「無人航空機(ドローン)による水田と白鳥の観察」(論文) 新潟国際情報大学経営情報学部紀要第2号
- ・「ドローン撮影による稲穂の縞模様と干拓排水路の来歴」(論文) 同上第3号

今後の課題・目標

- ・現在実施している観測を継続し成果をまとめる
- ・観測対象を新たに広げる
- ・オープンキャンパス、大学祭、高校の模擬講義などで、ドローンの活用性などをアピールする



経営情報学部 情報システム学科
河原 和好 准教授

担当科目
コンピュータビジョン
プログラミング入門
プログラミング環境



経営情報学部 情報システム学科
小林 満男 教授

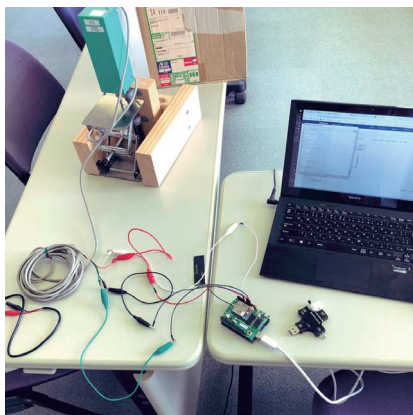
担当科目
情報システム
情報システム開発
人的資源管理



経営情報学部 情報システム学科
石川 洋 教授

担当科目
ソフトウェア開発
オペレーティングシステム
ネットワークコンピューティング

IoTによる地盤沈下の監視



活動の目的

これまで、ある程度貯まったデータを手動で回収していた地盤沈下の観測データを、IoTを用いることで、遠隔地のデータを観測できるようにする

活動の経緯

2016年度に新潟県保健環境科学研究所の方とIoT関連のイベントで会う機会があり、地盤沈下の観測にIoTを使うことができないかと打診を受け、これまでの研究が活かせるのではないかと行うことで共同研究を行うこととなった。これまで地盤沈下の観測データはデータロガーに記録したものを回収していたが、IoTを用いて通信を行うことで遠隔地のデータをリアルタイムで観測できるようにすることが目的である。

活動内容

地盤沈下の観測データはこれまでデータロガーに記録したものを回収していたため、リアルタイムで状況を確認することができていなかった。IoTを用いて通信を行うことで遠隔地のデータをリアルタイムで観測できるようにすることが共同研究の目的であり、観測したデータを通信し、データをリアルタイムで確認する所までは完成している。次の目標は省電力化であり現在その部分の改良を行っている。



経営情報学部 情報システム学科

河原 和好 准教授

担当科目

コンピュータビジョン、プログラミング入門
プログラミング環境

基礎データ

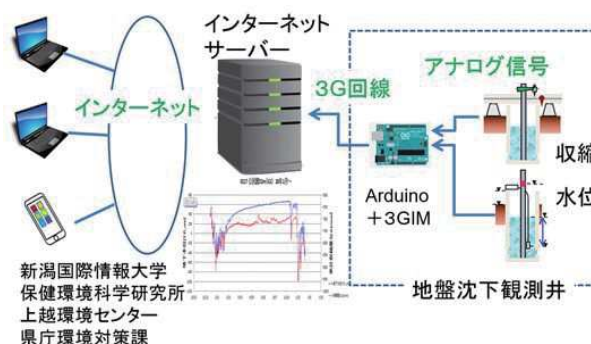
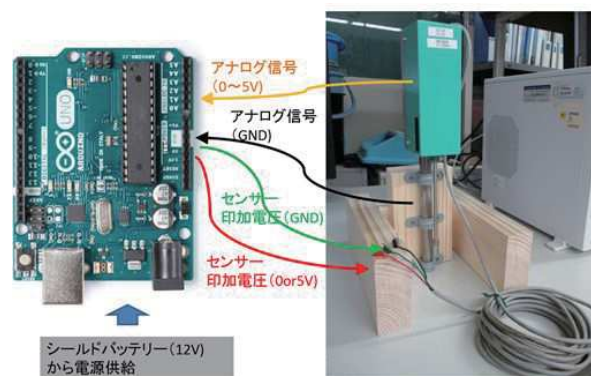
- ①主な連携先：新潟県保健環境科学研究所
- ②活動：地盤沈下の観測をIoTにより効率よく行う
- ③地域：上越市を予定（現在は実験段階）
- ④活動資金：新潟県保健環境科学研究所（機材提供）
- ⑤活動時期：2017年度－2019年度

活動成果

- ・地盤沈下観測システムの作成
- ・「IoTによる地盤沈下監視への適用」(研究ノート)
新潟国際情報大学経営情報学部紀要第1号
- ・「IoTによる地盤沈下の観測」(論文)
新潟国際情報大学経営情報学部紀要第2号
- ・「地盤沈下観測におけるIoTの適用」(同) 第3号

今後の課題・目標

- ・改良点の実現
- ・実際の観測地への設置と、その実験



赤塚、新潟砂丘の魅力 PR 等を通じた赤塚地域の活性化



基礎データ

- ①主な連携先：・コミュニティ佐潟 ・赤塚・中原邸保存会
・佐潟と歩む赤塚の会 ・赤塚郷土研究会 ・赤塚・佐潟歴史ガイド
- ②活動：2018年新潟市水と土の芸術祭の市民プロジェクトに「新潟砂丘遊々会」として参加し、赤塚、新潟砂丘の魅力 PR する活動を展開している。
- ③地域：新潟県新潟市西区赤塚
- ④活動資金：①会員の会費、②2018年新潟市水と土の芸術祭の市民プロジェクト助成金
- ⑤活動時期：2018年6月～現在に至る

活動の目的

赤塚の地元団体が取り組んできた赤塚や佐潟の魅力に加え、日本最大級の新潟砂丘の魅力を加えることで、赤塚地域の活性化に資する。

活動の経緯

赤塚や佐潟の魅力に、本学国際学部(地理学)の澤口晋一教授らの新潟砂丘に関する最新の研究成果から得られた新潟砂丘の魅力を加え、赤塚のPR冊子である『赤塚ガイドブック～まち歩き&砂丘歩き～』を作成した。「2018年新潟市水と土の芸術祭の市民プロジェクト」に参加し、「砂丘歩き」の普及活動を中心としながら新潟砂丘の魅力の発信を行ってきた。

活動内容

2018年度は、地元の各団体(代表者等)をメンバとする「新潟砂丘遊々会」を結成し、「2018年新潟市水と土の芸術祭の市民プロジェクト」に参加した。具体的な取り組みとしては、砂丘の清掃活動(2回)、砂丘ウォーキング(4回)、“未来につなげる赤塚の魅力”と題したシンポジウムと“赤塚の未来を考える”ワークショップを実施しました。また、砂丘ウォーキングを楽しむために案内板の設置や砂丘の高み(見晴らしの丘)に地元の間伐材、葦及び竹を使って東屋(遊々亭)を仮設した。

活動成果

下記の取組み及び新潟砂丘遊々会Webページにより、新潟砂丘の魅力 PR した。

- (1)砂丘ウォーキング:新潟砂丘の魅力、砂丘歩きの楽しさをPRできた(全67名参加)
- (2)砂丘シンポジウム:新潟砂丘、フットパス・まち歩きについて学んだ(全95名参加)
- (3)砂丘ワークショップ:赤塚の将来像、取組み案について議論した(全13名参加)

今後の課題・目標

地元の各団体と連携し、引き続き砂丘の清掃活動や砂丘ウォーキングルートの整備(道しるべの設置など)や地元の農家さんたちとの交流等を通し、赤塚のまち、佐潟や御手洗潟、そして新潟砂丘の魅力を発信する活動や砂丘農業のPRに取り組んでいく。

さらに、砂丘地に自生する巨木(気になる樹など)を新潟市の保存樹に登録する等の活動を通して、砂丘林の保全活動について検討していく。



経営情報学部 情報システム学科
小林 満男 教授

担当科目
情報システム、情報システム開発
人的資源管理



国際学部 国際文化学科
澤口 晋一 教授

担当科目
地球環境論、資源とエネルギー
世界地誌、新潟研究(自然と文化)



経営情報学部 経営学科
小宮山 智志 准教授

担当科目
社会学、経営情報論、行動科学
情報社会論



経営情報学部 経営学科
土屋 翔 講師

担当科目
経営学入門、経営戦略

栄養計算自分の朝食レシピを作成し栄養バランスをチェックしてみよう。

活動の目的

食育の授業において生徒の理解を深める。

活動の経緯

卒業生(2002)の増野江里子さんが卒業論文で作成したデータベースで、2015年ごろまでGoogleで“栄養計算”で検索すると1位に表示されてきた。

卒業生に委託し補強を加えており、2019/6/20日現在Googleを使い“栄養計算 新潟”で検索すると1位に表示されることからアクセスは容易である。

・授業で使用した紹介先は全て地域活動で学外へのルートを有する小宮山先生の情報提供によるものであった。

・実際の活動においても小宮山先生の支援は不可欠であった。

ドメインにはnuis.jpを使用しており使用制限はない。



基礎データ

- ①主な連携先: 赤塚小学校6年(2017/12)
翠江高校(2019/3)
白南中1年(2018/2)
赤塚中2年(2018/2)
- ②活動: 技術家庭・食育の授業でデータベースを使用し栄養バランスを確認した。
- ③地域: 西区
- ④活動資金: 個人研究費/共同研究費
- ⑤活動時期: 技術家庭で食育が取り上げられる12-2月

活動内容

小学校

- ・小学校の食育教育において食品摂取バランスの重要性を指導するため食品を6群に分けている。
- ・栄養計算DBで食品名を入力すると食品の背景色が6群の色に対応して表示できるように機能を付加し、小学校6年生の食育の指導に活用できるようにした。
- ・右下に栄養素の働きによる食品の6グループの色別表示を示す。

中学校

- ・中学校の4クラスでは、栄養計算データベースを使って事前に作成した食事(献立)の栄養計算を生徒自らが実行し、食事の栄養バランスを自ら確認した。
- ・データベースの使用にはWebの利用環境が必要であったのでiPad 15台と、WiFiルータ2台を準備。1グループ2名に1台のiPadを配布した。
- ・食品名の入力ができるか不安であったが全く問題なく使いこなしていた。国際・情報Vol.78
- ・詳しい説明なしで栄養計算から結果のレーダチャートなどのグラフ表示まで半数以上のグループが到達できた。栄養バランスを表示するグラフの意味も理解できていたと思われた。栄養バランスの計算結果の1例を右の活動成果に示す。
- ・“栄養バランス”の円グラフは授業中に作成したものである。詳細な栄養計算結果から、栄養バランスをより良くするため、食品の入れ替えに挑戦するグループもあった。

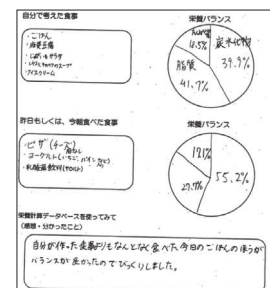
高等学校

- ・翠江高校では1, 2, 3年生100人に個人のスマホを使って朝食の栄養計算を行う模擬授業を行った。スマホの画面でも問題なく栄養計算を実施できた。
- ・食事について見直す良い機会を提供できた。

全削除	ツナマヨバスタ		
<input checked="" type="checkbox"/>	ミニトマト	(トマト類) ミニトマト 果菜 主	50g 5個 ミニトマト115g M10g
<input checked="" type="checkbox"/>	シーチキン	魚類 > ほかの魚 加工 油系 フレーク ホワイト	80g 1缶 シーチキンL1缶165g S1缶80g
<input checked="" type="checkbox"/>	アスパラ	アスパラガス 野菜 主	40g 2本 アスパラ1本:木30g 緑20g 1束150g
<input checked="" type="checkbox"/>	オリーブオイル	(植物油類) オリーブ油	5g 適量 オリーブオイル小さじ1.45g 大さじ1.13g
<input checked="" type="checkbox"/>	塩	<調味料類> (食塩類) 食塩	1.5g 小さじ1.4 食塩小さじ4g 大さじ18g
<input checked="" type="checkbox"/>	マヨネーズ	<調味料類> (ドレッシング類) マヨネーズ 卵黄主	18g 大さじ1.5 マヨネーズ大さじ12g 小さじ4g
<input checked="" type="checkbox"/>	粉チーズ	<牛乳及び乳製品> (チーズ類) ナチュラルチーズ パルメザン	9g お好み 粉チーズ小さじ1杯2g 大さじ4g カップ90g

活動成果

- ・小学校2クラス
食品グループを認識することにより栄養バランスの概念を容易に理解できるようになった。
- ・中学校4クラス
3大栄養素の栄養バランスを表示することにより自己の状態を理解し、改善の方向を考えることができるようになった。右図。
- ・高校1,2,3年各33名、計100名
自ら食材を確認しレシピを作製したうえで栄養計算を行い、栄養バランスと、1日の摂取量との比較ができるようになった。



今後の課題・目標

- ・新潟県内の利用が少ないのでPR活動が必要である。
- ・県、市町村の食育活動との協働をはかる。
- ・中央キャンパスで公開講座「オープンカレッジ」を開く。
- ・食品売り場や食堂での利用をPRする。

名誉教授

高木 義和

青少年のための科学の祭典



基礎データ

- ①主な連携先：青少年のための科学の祭典新潟大会実行委員会
公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館
- ②活動：「光受信機を作ってリモコンの光を聞いてみよう!!」
をテーマに、光通信の基礎実験を出展。
- ③地域：新潟県内
- ④活動資金：本学
- ⑤活動時期：2019年2月8日、9日、10日（準備日を含む）

活動の目的

青少年のための科学の祭典は、科学技術時代を生きる次世代の子どもたちのために、子どもたちが科学に親しみ興味関心を持ってもらうことを目的に開催している。さらには、新潟県が科学技術立県を目指していくための活動であるとも位置付けている。この活動には、新潟県内の小中学校・高等学校・専門学校・大学の教員や学生、技術をもった企業や地域グループなどが参画しており、本学もこの趣旨に賛同し、光通信の基礎実験を出展している。

活動の経緯

2004年に大学外から要請があり（詳細不詳）、途中中断があるも本学は都合8回程度毎年開催される本イベントに参加している。

活動内容

本学は、近藤研と西山研の共同で「光受信機を作ってリモコンの光を聞いてみよう!!」をテーマに、光通信の基礎実験を出展しました。この展示の狙いは、本学展示ブースを訪れた来場者に自ら光で通信できる驚きと実験の楽しさを感じてもらうことです。

実験は、来場者1組（ほぼ親子）に参加した本学の学生7名のうちの1名を配して対応し、来場者に実験のやり方を説明しながら来場者自らが実験を行うようにしました。本ブースへの来場者は昼時にも途切れることなく、2日間で主として小学生の親子連れ169名の来場がありました（会場全体では17,000人弱）。

活動成果

- ①来場者（主として小学生の親子連れ）に本イベントの趣旨である科学、実験の楽しさを感じてもらえたこと
- ②本学の広報
- ③実験の支援にあたった学生の育成（コミュニケーション法、説明法等）

今後の課題・目標

- (1) 展示物：この実験はもともと中・高生を対象に設計されている。しかし、昨今来場者プロフィールは、小学生以下にシフトしてきているとのことである。実際、今回の出展への来訪者の大多数は小学生以下であった。実験内容は、小学高学年では実施し、理解できるが、小学生低学年には難しいところもあるため、低学年向けの面白く、理解し易いものも準備する必要がある。
- (2) パネル：展示ブースの壁面が空いていたが、実験の説明をパネルにして張り出した方がよかったと考える。
- (3) 大学のパンフ：大学の宣伝用の場所が確保されていたが、用意したものが少なく、十分に活用できなかった。次回からは、もう少しパンフレット類の種類、ボリュームを増やす方がよい。また、大学の宣伝スペースには人が配置できるとよい（常時出なくてもよい）。
- (4) 学生の立ち上がり：西山研の学生3人はこの実験は全く初めてであったが、半日ほどで人に教えられる程度に熟達した。学生の能力の高さに感心した。



経営情報学部 情報システム学科

西山 茂 教授

担当科目

コンピュータシステム、情報産業、
情報システム特論



新潟国際情報大学

Niigata University of International and Information Studies

本校(みずぎ野キャンパス)

〒950-2292 新潟市西区みずぎ野3丁目1番1号
TEL:025-239-3111 FAX:025-239-3690

新潟中央キャンパス

〒951-8068 新潟市中央区上大川前7番町1169番地
TEL:025-227-7111 FAX:025-227-7117

ホームページ

<https://www.nuis.ac.jp/>

